

## 蘆花 50 年の懺悔と愛の福音「新春」

布川 純子

### 1、『新春』成立前後の状況

『新春』は、大 7 (1918) 4・11、福永書店から刊行された隨想集。

**蘆花は大 2 年 6 月「国民新聞」に連載していた小説「十年」を 11 回で突然中止。**

理由・作家としての行き詰まり

・心にわだかまっているものを思いのままに出来ない事情に追いつめられた事  
結果→死に場所を求めるような思いで 9 月初め九州に旅に出た。

行程=目的を持たないその旅で、結局満州・韓国も廻る**3ヶ月の大旅行**。

敬愛する西郷隆盛の命日に墓参、親類や歴史上の人物ゆかりの地を訪ね墓参。

10・26 京城（現ソウル）駅で兄蘇峰との決別。

多くの亡き人を弔ううちに次第に心も落ち着き、再び生きる気力が蘇った。

11 月末帰京。

○蘆花のめざす「内から外へ」という自己告白の希求は、

なかなか現実のものとはならなかつた。←両親がまだ存命であったこと

大 3・5・26 父一敬没

↓

蘆花は**『黒い眼と茶色の目』**と題して小説にした。

(自分の初恋であり悲恋に終つた山本久栄との恋の顛末)

これまで何度も書いては破り捨ててきた久栄との恋愛物語の内容は、  
妻愛子に大きな衝撃を与えた。

蘆花にとって読者の前に明らかにしなければならない第一の閥門。

○大 6・12、先の慰霊の旅を旅行記を**『死の蔭に』**と題し発表。注①

○「内から外へ」の告白思考はますます強まっていった。

『死の蔭に』と相前後して 12・1 から書き始めたのが『新春』。

★『新春』の本文引用と頁は、岩波文庫 1999.2.9 版(1950.1.15 初版)を使用。

### 2、『新春』の構成と執筆時期

『新春』は「母上に 健」と母親への献辞を掲げ、次の 7 つの編を收めている。

① 「春信」(7~99 頁) (一~六) 大 7・1・28~2・23 執筆。本書に初出。

- ・プロローグに「イザヤ書」53;2~10 と「ヨハネによる福音書」11:25 の一文
- ・『新春』中心となる文章。「巻頭の公開書」「公書」(『蘆花日記』1・26, 1・28)